

平成 30 年度大阪大学卒業式・大学院学位記授与式 総長式辞

はじめに

本日、人生の新たな一步を踏み出さんとされている学部卒業生の皆さん、大学院修士課程・博士課程修了生の皆さん、大阪大学を代表して心からお祝い申し上げます。ここに、平成 30 年度卒業式・大学院学位記授与式を挙行できましたことは、私ども大阪大学全構成員の大きな喜びとするところです。

この晴れの日を迎えるまでの皆さんの日々の研鑽とたゆまぬ努力を深く讃えます。また、この日まで長きにわたり学生の皆さんの勉学と研究を支えてこられました、ご家族の方々には、深甚なる敬意を表するとともに衷心よりお慶び申し上げます。

災害が多発した平成という時代

さて、1 週間後には、新たな元号が発表され、あと 1 か月余りで平成という一つの時代が終わりを迎えようとしております。皆さんが、生まれ、成長し、青春時代を謳歌した一つの時代が幕を閉じます。激動の 30 年でした。国際情勢、社会構造、科学技術、どれをとっても、大きなうねりの時代でした。

特に、この平成の時代、私は、多くの自然災害に見舞われた印象を強く持っております。平成 7 年の阪神・淡路大震災は、ここに座っておられる多くの皆さんにとっては歴史上の出来事かもしれません。しかし、平成 23 年の東日本大震災および福島第一原子力発電所の事故。この衝撃は皆さんの記憶にも鮮明に残っているのではないのでしょうか。

そして、昨年 6 月 18 日、大阪北部を震源とする地震があり、本学も大きな被害を受けました。その数週間後には、記録的な豪雨が西日本を襲いました。その後にも各地で地震被害、台風被害が相次ぎました。

そのたびに私たちは、自然の中での人間の無力さを思い知り、しかし人間の持つ強いまなざしに復興への希望を見出してきました。

そんな昨年の夏、記録的な猛暑のなか、本学の多くの学生が、災害ボランティアとして西日本豪雨の被災地で活躍しました。

ボランティアに参加したある中国人留学生は、

「被災者のニーズは、家の片付けだと思っていた。しかし、本当に必要な支援は人と人とのやり取りの中で気づくこと、それが重要だと思った。」

と語っていました。彼女がボランティアで入った家で、被災者と語り合いながら瓦礫の片付け作業をしていると、その家には障がいをもった家族がいることがわかったそうです。彼女は、なるべく家族の時間を大切にしたい、と念じたそうです。

報道番組で、リポーターが被災地から深刻な状況を伝えても、コンピュータグラフ

イクスを駆使して災害当時の状況をリアルに再現しても、その現場にいた人にしか知れない恐怖や悲しみが必ずあります。災害ボランティアとは、自分の時間を犠牲にして、何の報酬も見返りも求めずに、その場所に行って、困っている人に、途方に暮れている人に、手を差し伸べる行為です。絶望し疲れ果てた人と、同じ目線で、その人と共に同じ空気を吸う。そして、一緒になって黙々と汗を流す。それによって、硬直していた被災者の気持ちを解すのです。

昨年の夏、ボランティア活動をしていた学生諸君の話を知った時に、その活動を通じて、現実の厳しさを知り、人間としての幅を広げた本学の学生を、私は誇らしく思いました。

本当の正義とは

困っている人を助ける。この行為は、子供の頃に、いわゆるヒーロー、ヒロインを通じて、大切なこととして学んできました。

平成の時代の幕開けとほぼ同時に始まった「アンパンマン」。皆さんにとって、記憶の中での最初のヒーローではないでしょうか。

しかし、ひもじい思いをした人に、自分の顔を分けて与えるという行為に、当時は「子供の情操教育上よくない」という声も上がったそうです。しかし、アンパンマンは、平成の時代を通じて、子どもたちのヒーローとしての地位を確立しました。

その作者である、やなせたかしさんは、自伝のなかで、こう語っています。

- *ほんとうの正義というものは、けっしてかっこうのいいものではないし、そして、そのためにかならず自分も深く傷つくものです。そしてそういう捨身、献身の心なくしては正義は行えません。

「正義」。この言葉を、堂々と語るには、どこか勇気が必要です。

私たちは、歴史を通じて、イデオロギーに基づいた「正義」が、とても危うく、とても脆いものであることを痛いほどに学んできたからです。

昨日まで正しいと信じていたものが、今日から全く異なるものに変質する。このようなことは、この日本でも、過去に何度も起きています。

悲しいことですが、イデオロギーに基づく正義の行使によって、国際紛争や民族差別により迫害されている人々がこの地球上にまだまだ多く存在するのも事実です。

一方で、ボランティア学生が教えてくれたように、また、やなせたかしさんが語るように、「人」と「人」という関係性において、いわゆる利他的な心というものは、決して揺るぎのない正義にほかなりません。

いま、世界が解決すべき課題は

国連が定めるSDGs（Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標））では、まさに、そのような、イデオロギーと一線を画した視点に立っています。「貧困を

なくそう」、「飢餓をゼロに」、「安全な水とトイレを世界中に」、これら明確な17のゴールは、どの文化であれ、どの世代であれ、どの宗教であれ、「人間」という生物学的な種を俯瞰する立場から設定されています。私たちは、17のゴールを達成していく過程において、立ち足かかる課題を自らの手で解決しなければなりません。大阪大学で学んだ皆さんは、ここで学んだ「学問」の力を駆使して、これらを解決する主人公になるわけです。

大阪大学憲章の中で、「大阪大学は、（中略）「学問」の本質を踏まえ、いかなる権力にも権威にもおもねることなく、自主独立の気概のもとに展開する。」と謳っています。学問に基づき発展する科学技術も同様です。科学技術は、いかなる権力、いかなるイデオロギーからも独立していなければなりません。

科学技術を支配する

しかし、その科学技術が自主独立の下で発展しても、人間の尊厳をも左右する状況を生み出しつつあります。

たとえば、一般的に私たちは、「生命の誕生」を、母体から産まれたその瞬間を起点として捉えてきました。しかし、科学技術の発展は、その起点を前倒しました。胎児の状態でありながら、将来の病気などのリスクを確率的に知ることができるようになってきています。ただし、その一方で、親が、まだ顔すら見ていない、その小さな生命存続の選択を余儀なくされる場合もあります。ましてや、生命科学の発展により、ゲノムを操作して、人間を「作り出す」ことさえ可能になりつつあることに対し、大きな警鐘が鳴らされつつあります。

これは、「死」に対しても同様のことが言えます。従来は心臓が停止することが「死」を意味していました。それに対して、「脳死」の概念が確立し、今から20年余り前に、臓器移植法が制定されました。その制定に向けて、また、それ以降も、人間の尊厳とは何かについて真剣な議論が積み重ねられてきました。

さらに近年では、飛躍的に開発が進む人工知能、AI技術は、従来、人間が行っていた煩雑な作業や選択を回避し、効率的な判断が瞬時になされていく未来を作っていく。そのようなことが期待されております。

しかし、最近、そのAI技術自体にバイアスが存在することが研究によって証明されました。AI技術開発者のマインドバイアスが、AIソフトウェアにも受け継がれているのです。たとえば、顔認証AIソフトウェアの認識誤り発生率は、肌の色の濃さによって、大きな差が出ていることが明らかになりました。

ディープラーニングにより、最も効率的な最適解を出すと信じられていたAI技術を活用するとき、私たちはそこに過度の期待を持ちすぎて、根本的な思い違いをしているのかもしれない。先ほどの「人間の誕生」と「死」の概念、およびAI技術のような課題に対し、私は、本学の卒業生でもある、司馬遼太郎さんが、21世紀に生きる皆さんに残した言葉を思い出します。

* *21 世紀にあっては、科学と技術がもっと発達するだろう。
科学・技術が、こう水のように人間を飲み込んでしまってはならない。
川の水を正しく流すように、君たちのしっかりした自己が、
科学と技術を支配し、よい方向に持って行ってほしいのである。

司馬さんは、この文章のなかで、敢えて、「支配」という強い言葉を用いて、「科学技術」と「人間」の関係性を表しました。

まだ、平成が始まる前の、20 世紀の末に、司馬さんには、今、この世界で起こりつつある状況が見えていたのかもしれませんが。

これからの科学技術の発展は、理工情報系、医歯薬生命系といったいわゆる自然科学系の学問を修めた方々だけでは成立しえません。人文学・社会科学系の分野を極めた方々が、自然科学系の方々を巻き込み、「人間」としての尊厳を確立し、そのうえで、全ての人々の力で科学技術を監視し、その手綱を捌いていく時代なのです。

昭和の時代を長く生きてきた私たちが、右肩上がりの成長を続けてきたその一方で、残ってしまった課題に対して、皆さんはこれから立ち向かっていくことになります。しかし、皆さんには、大阪大学で成長したことを誇りに思いつつ、利他的な心と俯瞰的な視野を持って、一つ一つの課題を解決してほしいと切に願います。皆さんなら、それができると、私は信じています。

おわりに

最後になりましたが、本日に至るまでに、家族、友人、そして研究仲間、皆さんを陰で支えてくださった大勢の方がいます。改めてその方々への感謝の念を思い起こしてください。そして、青春を過ごした大阪大学のキャンパスと懐かしい思い出を大切な財産として、大きく大きく羽ばたいてください。

皆さん一人ひとりが、健康と幸運に恵まれ、笑顔に溢れる人生を送ってくださることを祈りつつ、私の式辞といたします。

本日は、おめでとうございます。

2019（平成 31）年 3 月 25 日

大阪大学総長
西尾 章治郎

(* は、やなせたかし氏の『アンパンマンの遺書』（岩波現代文庫、2013 年）より引用)

(** は、司馬遼太郎氏の「二十一世紀に生きる君たちへ」 『小学国語』6 年下（平成元年用）（大阪書籍株式会社、1989 年）より引用)